ユートピア

かけ足のヨーロッパ見学

竹中京子

昨年の夏、お茶の水女子大附属幼稚園夏期講習会に出席いたしました折、園長周郷先生のヨーロッパ幼児教育視察団のご計画のあることを伺いまして、先輩と同行できますのに意を強うして、参加させていただきました。

秋にはまだ早い九月初旬、旅の支度も心の準備もできませんままに羽田を飛び立ちました。ロンドンをふり出しに、ヨーロッパ六ヵ国二十二日の旅はかなり強行軍でしたが、健康のおかげで楽しい旅を続けることができましたことも、私をとりまく大勢の方々のご厚意も忘れることはできません。

最近海外視察に出られる方も日を追って多くなり、講演会をとおして、幼稚園の実態もかなり紹介されるようになりました。ことに、大きくゆれ動く世界の中で、日本の幼児教育もかなり世相の波にふりまわされている感を深くいたします。幼児教育の歴史は、時代は移り変わりましても、多くの子どもたちの姿をみつめて、よきものを育てる努力は休むことなく毎日続けられております。

あのいきいきとした輝いた瞳を失わせることのない保育が、幼児の幸福につながってゆくことを考えますとき、公害はもとより、日常生活のありかたにも、工夫と反省が必要であることに気がついてまいりました。おとなたちがうっかりなげかけた言葉に小さい心を傷つけることがなんと多いことでしょう。洋服のよごれたことに小言をいうことはあっても、子どもたちの心をよごしてしまったことに気がつかないおとなであってはならないと思います。その意味でもこのたびの旅行が、この目でこの肌で、保育の実態を見てくることができましたことは幸いであったと思います。

それぞれの国情によって、教育内容は少しずつ違いますが、どこの国も教育者の養成には非常に力をいれていたということです。直接幼稚園で指導にあたっておられました先生方のお姿を拝見いたし

ましたが、どの先生もいきいきとして健康そのものでした。自信をもって子どもととりくんでいる姿として、私たちもおおいに学ぶところがございました。

大きな自然の中で育てることの重要さも、経済成長を進める前に、教育が第一義として、大きくとりあげられていることは、大変うらやましく思いました。

最初の訪問国ロンドンの幼稚園（house on the hill）を訪ねました時は、雲一つない晴天の日でしたので、木々の緑も美しく、咲きみだれた色とりどりの花が、訪ねる人の心をなぐさめてくれるようにさえ感じました。家庭の延長といった感じの門をくぐって小高い玄関を入りますと、すぐ保育室が二、三続いて並んでおりました。その陰の台所に、整頓された調理の品々が清潔そのものといった姿で並んでいたことも、印象深くながめました。庭の施設も、ブランコ、スベリ台、小さな砂場程度でしたが、子どもたちはそれぞれ思い思いの場所で楽しそうに遊んでおりました。

そこに入園してくる子どもたちは選ばれることなく、五十人に対して十七名の先生が指導にあたっておられるとのことでした。小学校とのつながりの上にたって、まとまっているとのことでした。金持の家庭の子どももいれば、保育料を払えない家庭の子どももいるとのお話でした。施設は完全ではないが、あるだけの経費でまかない、寄付などでなんとかやれるとのことでした。

給食は一食について五シリング、日本円で二〇〇円ということでした。先生の俸給は二〇ポンド〜二五ポンド（資格をもった先生）助手は一〇ポンド（一週間）政府機関は五ポンド、十八歳で高校を経て、三年間幼児大学に学び、資格を得てspecialistとして指導にあたるということでした。

一般教養としてお互いに人見知りをしないように育てることが目標であって、しつけの点においても、家庭教育の中で幼い時からゆきとどいて指導されていることが、見学しただけでも、よくわかるように思いました。次に教育内容として、モンテッソリーの教育の中に遊びを加えているとのことでした。くだものであれば、早く熟すものと、おそく熟すものとあるように、無理のない教育こそ、やがては大きく大地に根をはって、しっかりした芽がすくすくとのびて、美しい花を咲かせてくれることと思いますと、その日を待ちわびるように、力強い言葉で話された園長の言葉も意義あることとおもいます。

一歩町に出ますと、古き時代の名残りをいまもとどめているかのように、聖パウロ寺院、ウエストミンスター寺院、大英博物館等、偉大な歴史を数々残して、そこを訪ねる人々があとをたたないということでした。

ホテルからほど遠からぬところに、ケンシントンパークがありました。うっそうとおい繁った森のような中に、美しい花と噴水が石畳みの道をはさんでふと目にとまりました。緑のじゅうたんをはりめぐらしたように、小高い山も一面に包

んで、秋の日がてり輝いていたあの美しい一幅の絵は、頭から離れることなく楽しい思い出となって残ることでしょう。静かに編物を楽しんでいる婦人、老夫婦が二人で新聞をひろげてめがねごしに見ていた姿ものどかに感じました。

英国に別れを惜しみながら、次の訪問地パリへと向かいました。天候に恵まれた空の旅は、何の不安もなく、快適そのものでした。ホテルについて間もなく十四年前の教え子の訪問が旅のつかれをいやしてくれました。

パリでは幼稚園が夏休みであったため、見学は残念ながらできませんでしたが、文部省最高官の職にいらっしゃるM. Tomas氏の熱意あふれる講演は幼児教育を知る上に大変参考になりました。

〃今フランスにおいて、この小さな子どもたちに何をしてあげることができるでしょうか？　それは幼児教育全体の責任です〃といわれたあの力強い言葉は、いまも心打たれた言葉として忘れることができません。

社会がやるべき教育的な仕事は、よいフランス語を教えることが最大の目的であって、母国語が最も重要であることに気がついて、最初の教育にかかっている。それをまじめに考えるようになって、イギリスやドイツに関係あるところでは、外国語も教えている。教育的な教育はすべて無料であるということでした。二歳から六歳までは、義務制ではないが、学校に続いているので統制を受ける。しかし自由に独立してやっているのが現状であるとのことでした。

国があらゆる教育問題に関心をもっていること、たとえば芸術教育の中に絵と音楽と詩が含まれていて、詩はわからなくとも聞いていればわかるということでした。絵の教育もデッサンを主として、このように書きなさいというのではなくて、自由表現をするという方法でなされている。音楽は自分が聞いてわからなくとも、第一級の音楽を聞かせることによって、子どもの耳の教育といっしょに、歌をうたったり、美しい音楽を味わうことができる。そこでリズムを感じとることになる。

次に、身体の教育に力を注ぎ、子どもたちの医学的な検査が一人の園医によって責任をもってされる。その状態は家庭に知らされる。第二の目的は、十分に息を吸って、呼吸をすることを教えるなど、自分で自分を鍛えてゆく方法が指導されていることなど、いろいろな面で学ぶところがありました。全ヨーロッパを支配したフランス文化の誇りが脈々と流れていることと結びあわせて、教育の面でも十分うかがうことができました。

ミロのビーナスを見るべく、ルーブル美術館を訪れました時、ひきもきらぬ観光客の中に、カメラを肩にした日本人の多く訪れていたのに驚きました。特に人気のある、「モナリザ」、「おちぼひろい」、「晩鐘」など多くの名作の中から、これだけをと、必死になってみてきたこともすべて生涯の思い出となってなつかしく残ってゆくことでしょう。美術を愛する文化、伝統、最高といわれているステン

ドグラスをシャトル大聖堂ノートルダム寺院に見ることのできた時の感激や、シャンゼリゼのネオンの輝きを楽しい思い出として、ジュネーブに向かいました。

さらに西ドイツミュンヘンでの滞在も忘れがたい思い出がございました。第二次世界大戦後の復興はまさに、驚異的と聞いておりましたが、教育のためには国が大きく援助の手をさしのべているということで、創立六年目というカルルハイツの幼稚園を訪ねました。ここでは、幼稚園と小学校との併設による総合教育がなされていて、フレーベルの教育が織り込まれていることが設備の上でも保育内容においてもうかがわれました。

バスを降りて間もなく、広大な森が眼の前にひらけて、私たち一行を喜ばせてくれました。年輪をへた古木が横たわり橋を作り、スベリ台となり、ジャングルジムとなり、大きなふし穴の中に女の子が小さくからだをかがめて、本を見ているおじいさんの方を向いて、手を振っていた平和な姿を、ここに見ることができました。戦後のドイツ国民の人間生活の上に求めている風景として、あかずながめたことでした。鉄筋の園舎が見えたかと思うと、自転車で通園している親子づれに出会いました。そこで母親だけが自転車から降りて、園児だけそのまま走り去って玄関に消えていったのも印象的でした。

保育室ではあまり活動的な面は見学できませんでしたが、ふと窓ごしに眼を向けると、朝の日ざしをあびて十人あまりの子どもたちは元気よく、民族衣裳をつけた若い美しい先生を中心にして、ゲーム遊びに興じていたことでした。保育室には、フレーベルの恩物がならべられ、机の上に、洋だこが二本の尾に色とりどりの蝶を結びつけてあった、あの交互の色彩にも日ごろの保育が感じられました。子どもの活動している姿が見られなかったことが残念でしたが、このたこも近いうちに、子どもたちの手で空高く舞いあげられることを心にえがき、名残りを惜しみながら次の訪問地ザルツブルグへと向かいました。

途中チロル地方の田園風景を満喫し、長い長いバスの旅もあきることなく、インスブルグ、ウィーン、ローマと忙しい旅程もつつがなく終えることのできましたのも、心を一つにして進もうとしている保育者の情熱が、一人一人守ってくれたことと信じております。

まとまりません記録でおはずかしく思いますが、つたない筆をとどめさせていただきます。

（十文字幼稚園）